

IATSS三十周年によせて

コミュニケーションの復活

月尾嘉男 東京大学名誉教授

2002年末に大学を退官し、翌年1月に総務省総務審議官も辞任して完全に自由の身分となり、カヤックやクロスカントリスキーなどアウトドアスポーツを満喫している。還暦を機会に南米大陸南端のケープホーンをカヤックで漕破し、ケープホナーとなった。



大学院生であった時期は大学紛争の最中で校舎がロックアウトされてしまい、先輩の建築設計会社で建物の設計やコンピュータ制御システムの設計を手伝っていた。そのような時期に石井威望先生や井口雅一先生が開発しておられた自動制御で軌道を走行する交通システムの研究を手伝わせていただくことになり、これからの社会にとって通信や制御が重要だと気付くことになった。そして国際交通安全学会に参加させていただいた結果、交通と通信の両方に関連するプロジェクトで研究する機会もいただいた。その研究で印象にあるのが、故岡並木先生から教示いただいた、古来、トランスポートーションという言葉はモノを運搬するときに使用し、ヒトの移動にはコミュニケーションという言葉を使用していたという知識であった。

そこで、現在では通信という意味でしか使用されることのないコミュニケーションという言葉が交通と通信が一体となった社会を象徴する表現として意識するようになったが、40歳台後半から次第に軌道を逸脱して交通には縁遠くなり、それほど専門知識もない通信という分野に深入りすることになった。そして最後には通信政策が専門という羊頭狗肉の学徒になってしまった。

そのような個人の問題はともかく、現実の社会では確実に本来の意味でのコミュニケーション社会が進展している。第一が携帯電話の爆発とでもいべき増加である。日本は出遅れて普及割合は国民の60%程度であるが、すでに国民の90%以上が使用している国家も多数存在している。携帯電話は移動する身体とともに通信端末も移動するから、交通と通信は完全に一体となっている。高度道路交通システムと翻訳されるインテリジェント・トランスポートーション・システム(ITS)も実用になり、平成16年10月時点で、カーナビゲーションが1500万台、VICSが900万台、ETCが400万台の普及である。これは世界で最高の数字であり、日本はITSの先端国家である。かつて走行している車両は外界から孤立していたが、ITSによって外界と一体となることができた。

現在、新規に開始された自律移動支援という国家プロジェクトは、この一体の世界を歩行している人間にまで拡大しようという構想である。集積回路にアンテナを組み込み、外部から電波を送信すると、その集積回路に記録されている情報を受信することのできるRF IDもしくはICタグといわれる技術を駆使して、人間が歩行している場所の情報を入手できるようにするものである。一例として、歩道の敷石や電柱などにICタグを添付しておけば、端末装置を経由して、場所の情報や道路の案内を受信することが可能である。この情報提供は音声でも可能であるから、盲目や弱視の人間でもサービスを楽しむことができる。人間は場所と情報交換することにより、快適かつ安全に移動することができるのであり、最近流行のユニバーサルデザインを代表するシステムである。

蒸気機関や内燃機関の発明により交通手段が発達する一方、有線通信や無線通信の発展で通信手段も進歩し、しばらく両者は乖離していく方向にあった。しかし、それぞれがさらに発展した現在、本来のコミュニケーションという言葉にふさわしい技術が登場してきた。IATSSも、ぜひ交通と通信が融合した社会をさらに発展させることに尽力されることを期待している。